

28 精神薄弱児（者）のスラム——東京深川高橋

ドヤ街——における実態について

東京都江東区教育委員会 田宮 寛 己

<はじめに>

わが国の特殊教育は近代教育制度としてはまだ新しく、その緒についたばかりである。とりわけ精薄教育についてはその後進性が指摘されている。それらは就学率の問題に集約的に表われているといえる。また家庭の経済状況も劣悪であり憂うべき状態にある。スラムは都市解体现象の過程に発生した問題であるが、その構成員である社会的落伍者の更に底辺に精薄者が疎外されて生きている。精薄教育の特質は教育と医療と社会的措置の協同関係にあるといわれ、不完全ながら法制上の措置もなされるようになってきた。しかし、実態においては底辺にまでは及んでいないといえる。

<問題の所在>

いまこれらのことを“どや”とよばれる深川高橋の簡易宿泊街および行政単位である江東区について当つてみる時、都内の他地域と強い対照をなしているのを認めることができる。すなわち、全国平均を超える出現率。特殊学級在級者の $\frac{1}{3}$ を占める生活保護、教育扶助家庭。欠損家族あるいは實際上それに近いものの高率。非行、怠休の高率。家族性精薄の頻度の高さ。発生原因別に見た単純型の多いなどがそれである。このことは社会の底辺である“どや”居住者と精薄のエコロジカルな関係、ひいては低文化型（群）—— Subcultural type (group) —— とよばれている内因性精薄の分類法にまで及んで検討せねばならない問題でもある。

<調査・検査>

これらのことを確かめる為に区教育相談所、学区校の資料を基に地域の調査および心理検査を実施した。

＜結論＝中間報告＞

初期学習と関係して、幼児期の不適切な教育環境による仮性精薄の多いこと。社会の吹きだまりとしての気易さや食物の低廉さから精薄者が多く住みついたということが相互に因果関係を形成している。